東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

Book Review

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田部,俊充 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173807

書評

斎藤　毅:『「人生地理学」からの出発　牧口常三郎先生 生誕 150 周年記念』鳳書院，2021 年，243p.，1,500 円（税別）

筆者の斎藤毅先生は，1977 年以来 20 年間にわたって東京学芸大学教育学部地理学研究室で研究と教育に取り組まれ，退官後も立正大学地球環境学部で後進の指導にあたられた．斎藤先生は東京学芸大地理学研究室に事務局のある日本地理教育学会の学会誌『新地理』を専門誌として確立され，それにより評者をはじめ多くの地理学・地理教育関係者が活動の場を得た．評者は 2013 年 4 月より日本地理教育学会学会誌新地理の編集委員長を 3 期 9 年務めているが，斎藤先生をはじめ地理学研究室の諸先生方，先輩，後輩の地理教育への熱い思い意志を意気に感じてここまできたつもりである．そういう意味では斎藤毅先生は「日本の地理教育の父」のお一人と表現して良いと思う．

本書は，牧口常三郎氏（1871-1944）が地理教育者として著した『人生地理学』に焦点を当てた書である．豊かな世界像を自己の中に築くことは創造的な人生観を形成することを地理教育論の視点から再解釈を行っている．

牧口氏は 1871（明治４）年に，柏崎県刈羽郡荒浜村（現在の新潟県刈羽郡荒浜村）に誕生し，1889（明治 22）年に 17 歳で北海道尋常師範学校（現在の北海道教育大学）に入学，1893（明治 26）年に 21 歳で卒業，附属小学校訓導を経て 1901（明治 34）年に 29 歳で上京して出版社に就職する．その間，1896（明治 29）年には 25 歳で地理地誌科では北海道初の難関の文部省中等学校教員検定試験に合格する．1903（明治 36）年に 32 歳で『人生地理学』を出版，41 の新聞・雑誌に書評が掲載され，大きな反響を呼ぶ．牧口氏は現在の創価学会の基となった創価教育学会の創立者であり，今年は生誕 150 周年に当たる．斎藤先生はコロナ禍でポッカリ空いた持て余し気味の空白の時間に，「コロナ克服後の新たな世界への出発を目指して！」という魅力的な言葉で読者を誘い，『人生地理学』をひもとき，人間の生き方や地球環境，国際社会との関りをゆっくり考えることを勧めていて，先生らしいと思う．

続いて，本書の内容について整理する．第 1 章「牧口常三郎と「人生地理学」」では，斎藤先生が初任地であった鹿児島大学で牧口氏の書物に出会ったこと，牧口氏と地理学の関係などが興味深く示されている．札幌農学校出身の志賀重昂（1863-1927），特に 1894 年に出版された『日本風景論』の影響を受けている点が説明されている．

第 2 章「「人生地理学」の概要」では，1903 年に出版された『人生地理学』の概要が示され，人間と自然の関りの多様性，郷土の観察の重要性が強調されている点を紹介している．具体的には「楽しく読める地理学書」として，第 1 編「人類と生活処としての地」，第 2 編「地人相関の媒介としての自然」，第 3 編「地球を舞台としての人類生活現象」，第 4 編「地理学総論」を紹介している．

第 3 章「継承・発展させたい研究課題」では，今後さらに発展させたい研究課題，『人生地理学』の新たな意義，として，志賀重昂の理論を深めたこと，トポフィリアの先駆者であったこと，地理

教育の経験を反映していたこと，郷土研究への強い関心，NHK の人気番組「ブラタモリ」，フィールドワークについて言及している．

第 4 章「地理学の考え方と人生」では，歴史学の対となる学問として地理学の学問性を再評価し『人生地理学』でも引用しているヘーゲル（1770-1831）の『歴史哲学講義』には，「世界史の地理的基礎」が述べられていることが紹介されている．

第 5 章「子どもの発達と「地理」」では，地理学や世界像がどのように形成され，どのような意味を持っているか，自発的な空間行動の起点としての母親の懐，ロジャー・ハートによる『子どもの場所の体験』，山梨県丹波山村の「児童世界像」，科学的世界観，代償行動について論を進めている．

第 6 章「代償行動の一つ，郵便切手の収集」では，趣味の郵便切手の収集を生きた教材として評価している．『人生地理学』の「日本における地理学の発達」には内村鑑三の『地人論』が引用されていることが紹介されている．ここでは「ゆえに万国地理切手蒐集のごとき，そのもの自身は一の実用なきがごとしといえども，その万国地理の講究を促し，（中略）世界観念を発起するがためには少なからぬ功力ありとす」とあり，「世界像形成」につながることを示唆している．後述の「切手で築こう 現代の世界像」で詳細は述べるが，切手の「収集から達成感，世界像へ」「分類は科学の方法の第一歩」といった見出しからもわかるように，「切手愛」に満ちていることが読み取れる．

第 7 章「科学的世界観と地理教育」では，地理教育論の今後に向けて，科学的世界観形成のための日本の課題を示している．特に，小学校の社会科のなかでの地理教育が，同心円的拡大理論，日本の農業，工業といった一種の系統地理学の手法が取られていることへの疑問を呈していて，改めてその問題の本質を問い直す必要があると強く感じた．また地名を覚えることは地表の日常的な位置情報に不可欠な要素であり，『人生地理学』の中で覚えさせるための工夫があることを紹介している．

第 8 章「自然美と新しい風景観」では，『人生地理学』における自然景観に対する人々の思い入れが記されている．新たなトポフィリアとして，熱帯や亜熱帯の風景に対する美を再評価している．

第 9 章「多様な世界像の共存と国際理解」は，『現代の世界像』のご著書のある，斎藤先生の国際理解論の真骨頂であり，感性のフィルターを通す，米国の文化人類学者クラックホーンの異文化こそ自分の持つ文化を映し出す鏡で身に付けた自分の文化を相対化させながら認識することが大切である，という指摘が興味深い．また，中世の鎌倉と日蓮，異文化へのまなざしといった魅力的な視点を示しながら都市化社会の歪みの問題点，体系的な世界地理学習による国際理解が必要である，という論を展開されている．そのうえで，牧口氏は，『人生地理学』のなかで，花鳥風月を愛でる伝統的な日本の自然観について，詩歌を具体的に挙げて論じている，としている．

第 10 章「人生地理学」からのメッセージ」では，『人生地理学』を座右に置き，現代に軸足を置きながら，「自己を知り，豊かな世界像を築く」意義と方法についてまとめた，と整理している．そして，結びに引用されている吉田松陰の「地を離れて人なし．人を離れて事なし．人事を論ぜん

とすれば，まず地理を究めよ」という言葉を紹介している．

145 ページから 211 ページは「切手で築こう現代の世界像」である．斎藤先生は現在，東京学芸大学名誉教授であるとともに財団法人日本郵趣協会の顧問をされ，趣味の切手の専門家としても活躍されている．本書では，以下の 32 か国があげられている．

1 サンマリノ共和国，2 マルタ共和国，3 スペイン王国，4 イスラエル国，5 オランダ王国，6 カナダ，7 キューバ共和国，8 アメリカ合衆国，9 国際連合，10 南アフリカ共和国，
11 ニュージーランド，12 インドネシア共和国，13 インド，14 シンガポール共和国，15 タイ王国，16 モンゴル国，17 パラオ共和国，18 フィリピン共和国，19 タヒチ島と仏領ポリネシア，20 仏領ニューカレドニア，21 オーストラリア連邦，22 パプアニューギニア独立国，23 香港・マカオ，24 南極大陸，25 ベトナム社会主義共和国，26 マレーシア，27 スリランカ民主社会主義共和国，28 イラン・イスラム共和国，29 カタール国，30 アラブ首長国連邦，31 サウジアラビア王国，32 アルメニア共和国

それぞれの国は 2 頁構成で，斎藤先生とっておきの切手と国のイメージを適切に表す珠玉の言葉で彩られている．その中でも特に，評者の大好きな「３スペイン王国」だけ紹介させて頂く．切手は白，黄，赤，青，黒の色鮮やかな 1981 年発行の「ピカソ生誕 100 年」，「領土・民族問題抱える芸術の観光の国」という見出しの言葉，ジブラルタル，観光からバスク，カタルーニャの独立問題まで，エッジを効かせ幅広く精選してスペイン像を伝えてくれる．

212 ページから 222 ページは「牧口先生と斎藤先生と私」である．文化地理ゼミの先輩の岩本廣美奈良教育大名誉教授の本書の刊行を寿ぐ，地理学，地理教育がなぜ重要なのか，読者の方々に，特におすすめする論点，として興味深い論考が掲載されている．

岩本氏より本書の書評をお引き受けして想い出すのは，斎藤先生の学生や卒業生に対する前向きな言葉かけである．アイデアが浮かんで文章を書いて見て頂くと，「簡単だよ」「やってごらん」と言われ，何だかすぐに文章が書けるような気になる．でも，そんなに簡単ではなく，七転八倒しながら書き上げてまた見て頂くと，「簡単だよ」「やってごらん」とまた励まして頂く．そしてまた新たなアイデアを頂く．

今思い返してみるとこの繰り返しを経験させて頂いたことが，現在に活きている，と感じる瞬間があった．学部の 3 年生や 4 年生で経験した教育実習や卒業して小学校現場で児童の前に立ち，教師として児童に相対した時，まずは「簡単だよ」「やってごらん」と児童の発言を受容し励ます．この「受容」のスタンスは当時の多くの地理学研究室の先生方から教えて頂いたように思う．そしてそれが現在の論文執筆のエネルギーになっているように感じている．

本書を読むと 1934 年生まれの斎藤先生のエネルギー，飽くなき知的好奇心，新たなものへの少年のような創造的な心が伝わってくる．私も現在の斎藤先生の年齢になるまで出版が出来たらいいな，と思いながら，推薦の言葉とさせて頂きます．

（田部俊充：31 期　日本女子大人間社会学部教授）